
脅威の中毒性につき

妙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

脅威の中毒性について

【Zコード】

N77750

【作者名】

妙

【あらすじ】

ジタンはきっとかわいいもの好き。絶対。いやそれから。そうだけどいい。

そんな妄想から生まれたネタ。

(前書き)

はじめての投稿です。

テストを兼ねてブログに乗せた小話を投稿したいとおもいます。

基本、兄弟甘々。

ブラコン最高。

自分の趣味全開ですので、充分に理解いただけるように少しへんじます。

「クジヤ……」

ほら、また始まった。

ジタンのいつもの病気が。

「クジヤ、あの……」

外に出ると……特に買い物などと一緒にいると、かなりの確率でこうなるんだ。

ジタンの視線はある一点に集中しつつ……だからこそ世話をなく動いている。

「だめ。我慢なさい」

「じゃあっ、ほんのちょっとだけ……！」

必死に懇願する田。

今度は僕に向き直り、上田遣いで、頬は少し紅潮し、軽く眉を寄せて潤んだ瞳で「だめ?」と主張する。

おねだりの顔。

全身全霊で首を縦に振りたくなるところだが、負けじと視線を外す。

「だめだよ、……そのまま連れて帰つて来そうで怖いからね」

「そんなことしねえよ、な、頼む！ちょっとだけ！！」

何かを鍛成するんじゃないかつて勢いで、ジタンが顔の前で勢いよく両手を合わせた。

手袋とレースを挟むので、「ぽふっ」というどこか情けない音がする。

ついでに本人の心中を物語るように、尻尾がもどかしそうにバタついた。

「……仕方ないね……」

結局、ため息とともにいつものように許可を出し、

「やつた！クジヤ大好き！…」

と、このお馴染みのセリフを聞いて渋々ジタンの後に次いで店の中に入る。

ペットショップの中。

「お、あんちやんやつとお兄ちやんのこと説得できたみたいだね」「すいません、あの子触らせてください。」

「あいよ、やつきからずつと眺めてたもんねえ」

そういう流れを経てジタンの腕に託されたのは、生後数ヶ月程度の小さな子猫。

先ほどからジタンがガラス越しに熱烈な視線を送っていたのがこの猫だ。

小さな毛玉を受け取つて満足そうに頬擦りをするジタンを、静かに見守つた。

「可愛い…つ、可愛すぎるークジヤも見てみろよほらっ」

「…見るよ」

あくまで傍目から。

ジタンがいつその四足歩行顔面舐め回し獸を、懐に仕舞い込みやしないかと見張つていなこと。

ジタンはと言えば、僕が一緒にになって鼻の下を伸ばし、猫に触れて戯れないと不満そうに猫へ「こんなに可愛いのになー？」と愚痴つている。

…というか、どうしてあいつはジタンの口ばかりを狙つているんだい？

愛情表現にも段階といつもの…あ、今舌が入ったんじゃ…

「よし、アイルーと名付けよつ

「ひり、飼わないからね

「…」こんなになついてるの？」

何をそんなに残念そう。

「そいつはきっと誰にだつてそつするよ…それが仕事だからね。それにジタン、アイルーというのは種類であつて決して名前では…」

「こちよこちよこちよ…あはははは」

聞いちやいない。

今度から人の話は最後まで聞きなさいと、身体に教え込まなくてはいけないね…。

怒りの方向が恼ましいのはいつものこと。

それにもペロペロペロペロと節操のない猫だ。そんなにジタンが美味しいのかい？

まあそれは最高に美味しいだらうね、だつて僕の自慢の弟なんだから。

今のうちに存分に味わつておくがいいよ、僕はいつだつてあの子のありとあらゆるところを愛撫しつくしてゐるんだから。帰つたら猫以上に執拗に

「なあ、おい…顔が怖いぞクジャ」

「…」めんよ

何を考えているんだ僕は。

「さあジタン、そろそろ帰るよ。うちには銀竜がいるんだから猫は飼えません。いいね？」

「……はーい…」

至極残念そうにジタンがしょげる。

一匹の様子を微笑ましそうに眺めていた店員に子猫を預け、猫の尻尾とジタンの尻尾が同じようにたらん、と力なくうなだれた。まったく、どつちがどつちなんだか。

「ジタンもあれくらい僕に積極的だつたらいいの」「ん、何がだ？」

尻尾を嬉しそうに立てて、顔を突き出して、僕の口に何度も何度も思つがままのキスを……なんだ、いつもの情事じゃないか。

「なんでもないよ」

帰つたらさせるし。

「…？ ならいいけど」

荷物持ちの銀竜に乗つて家路につく途中。ジタンは猫に触れた幸福感のまま、機嫌よさそうに風に当たつていた。

「なあ、クジャはせ、猫を見て可愛いー！とか触りたいー！とか思わねえの？」

ジタンが満面な笑みで聞いてくる。それを一瞥して、

「思つよ」

と答えた。

「普通に、猫を眺めるだけたらね」

誤解のないよう付け加える。

そう、猫が嫌いというわけじゃないんだ。ただその猫がジタンとあんな風に戯れてたりすると、なんといつか我慢ができなくなる。

「普通に… どういう意味なんだ…？」

本気で悩む弟を横目に、自分に対する言い訳を必死で考える。

そもそも、どうしてあんなに妬くのかと聞かれたら、ジタンが大切だからだ。

一番愛しい」と思つてゐるからだ。

「逆に聞くけれど…、どうしてジタンは猫があんなに好きなんだい？」

「可愛いからじゃねえか？」

曖昧な。

「可愛いかったら、抱きしめたいとか、頬擦りしたいとか、なんか思うだろ」

「確かにねえ…」

ジタンに言わると、同意せざるを得ない言葉だけね。

「可愛いは愛しいか…」

「まあ、そうなるな」

「……僕はどうなのかな…？」

いけない、つい口から出てしまつた。

「は？」

なるべく平常心を装つて顔を背ける。

背中のジタンがすぐに言われた意味を汲み取つて、にやりと呑み笑いをしているのが分かる。

「クジャ…もしかして、……猫に妬いた？」

「いや、違…」

ぎゅう。

言い終わる前に背中から抱きつかれて銀竜の上から落ちそうになる。洒落にならなすぎて「危ないじゃないか」が出てこなかつた。

「クジャは格別だろー」

背中に頬擦りしていく愛しい子。

「ていうか…猫とは逆だな」

「逆つて…？」

「猫はさ、可愛いから愛しいわけだろ？…クジャはさ、そつじゃなくて…愛しいから可愛いんじゃねえかな」

衝撃の事実だ。

ジタンは僕を可愛いと思っていたのか。

背中に額を擦り付けたままあたり、自分で言つていて自分で照れているに違いないけど、そういうのは世界一の可愛さには含まれないんだろうか。

「お前の場合、可愛いより綺麗派だけどな」

それは自負してる。

といふか、さつきからこの子は僕を嬉しさか何かで発狂させたいのかな？

「そうすると、僕なり…両方つてことになるのかな」

ジタンが顔を上げた。

振り返つて、頬が林檎みたいになつている状態のジタンを視界に捉える。

「君を愛しく思えば思う程、可愛らしく見える。そして…僕の弟は本当に可愛いから、尚更愛しく思う。更に言つなら、そんな君が僕を愛しく思つてくれることが嬉しくて、僕も君がもっと愛しくなる」「あ、それは俺も嬉しいかも。そういうの…えつとなんていうんだつけな…」

そういうのはね、

相乗効果っていうんだ。

でも教えてあげない。

だつてこれからそれを身を持つて体感してもうつか。

ただいま、という台詞と共に屋敷の前に銀竜が降り立つた。買い物の荷物を2人で抱えて玄関のドアを開ける。

銀竜が自分の寝床へ戻つていく時に、何かため息のようなものが聞こえた気がしたが、

聞かなかつたことにしておいた。

ごめんね、

バカツプルが楽しすぎて仕方ないんだ。

(後書き)

猫つてかわいいよね。
でも自分家の猫は全然構ってくれないの。
だから妄想すんの。
あの柔らかい尻に、尻尾に、ああ、触りてえなあ
…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7775o/>

脅威の中毒性につき

2010年11月8日01時16分発行